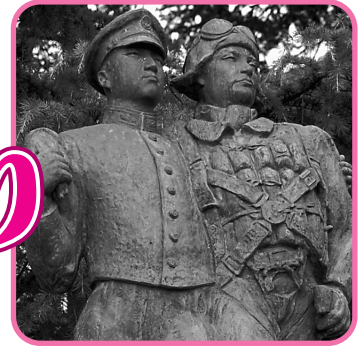


（仮称）予科練 平和記念館だより



町教育委員会生涯学習課 ☎888-1111(327)

カ レンダーも残り一枚となり、何かとあわただしい月になりました。これからが正念場という受験生やご家族も多いのではないのでしょうか。

今月号は、67年前の受験生が家族にあてて出した手紙を紹介します。

●予科練の受験

予科練生になるには、いくつかの試験をクリアしなければなりません。第一次が学力試験、合格すると第二次の適性検査（平衡感覚など、飛行機の操縦に適しているかの検査）、身体検査、口頭試問などを受け、合格して晴れて制服に袖を通すことができましたのです。

予科練を受験するということは、周りの期待を一身に背負うことでもありました。また、第一次試験は各都道府県に設けられた試験場で受けることができましたが、第二次試験は町にあった霞ヶ浦海軍航空隊をはじめとした各海軍航空隊で行われたため、一人故郷を離れて遠路はるばる試験会場に向かう少年も多く、彼らの受験にかける気持

ちはいかばかりだったかと思われまます。

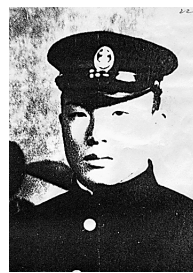
●67年前の受験生

福山資（たすく）さんは、大正13（1924）年4月1日佐賀県神崎町に生まれ、15歳で予科練を受験して合格、甲第5期の飛行予科練習生となりました。土浦海軍航空隊（現陸上自衛隊武器学校）にて1年半の予科練生活の後、「鬼の谷田部蛇の筑波」とも言われ、厳しさでは定評のあった谷田部航空隊（現つくば市）での飛行訓練を経て、パイロットとなりましたが、艦船で移動中にインドシナ海上で亡くなられました。享年18歳でした。

手紙は、福山さんが予科練の受験中に母親にあてたもので、15歳の少年が一人試験に臨む心情がよく表われています。町には、福山さんが予科練を受験するときから亡くなる前までの家族にあてた手紙（複写）が13通寄贈されています。予科練では検閲で手紙などは強制的に内容を調べられたので、自由に思いを伝えるのは難しいことでした。

しかし、文面を読むと制限された表現ですが、その行間からはあふれるほどの言葉にならない家族への思いと郷愁がにじみ出ているように思えます。また、手紙の内容から厳しい訓練の様子や、それに伴って福山さんが心身ともに大きく成長していく様子がよく

く分かります。受験は今も昔もつらいものです。でも、頑張つて乗り越えたらひとまわり大きな自分が待っている。福山さんの手紙は、そんなことも言っているように思えてなりません。受験生の皆さん、頑張つてください。



▲福山資さん

昭和十四年九月二十七日

拝啓

当地に着いてから最早三日間も過ぎました。受験始め以来無事通過しております。しかし昨日五十名余り、今日五十名余り既に百余名の不合格者が帰郷して行きました。可愛そうなものです。中にはお母さんや姉さんに慰められて泣く泣く帰って行く者もおります。そんな場合、自分の身にひきかへて一しをさびしさが増して参りますが、直ぐその後から何帰るものか是非合格せねばといふ元気がムラムラと起つて来ます。何から書いてよいか、まだ今日に至つても少しも落付きませず、しんみりと手紙を書く気にもなりません。

科練
當地に着いてから最早三日間も過ぎました。受験始め以来無事通過しております。しかし昨日五十名余り、今日五十名余り既に百余名の不合格者が帰郷して行きました。可愛そうなものです。中にはお母さんや姉さんに慰められて泣く泣く帰って行く者もおります。そんな場合、自分の身にひきかへて一しをさびしさが増して参りますが、直ぐその後から何帰るものか是非合格せねばといふ元気がムラムラと起つて来ます。何から書いてよいか、まだ今日に至つても少しも落付きませず、しんみりと手紙を書く気にもなりません。

▲手紙▶